はしがき

特集 第十二回中央教化研究会議

身延教師大会

激動と混沌の渦まくなかで、一九八〇年代が開幕した。社会的危機と精神の不安は、ますます増大している。末法濁悪の暗闇は、深く、はてしなくひろがっている。

暗闇をとり除く光明をいかに輝やかせてゆくか、濁悪のただ中に心身をおきながらいかに清浄な生命と生活を開花させてゆくか。すなわち、法華経と日蓮聖人の信仰教説を現代社会にいかに活現し流布し「生死」の資糧・明鏡となしえるのか――日蓮聖人第七百遠忌を明年に迎えんとする今日、何よりも大切な事がらは釈迦仏の告勅と日蓮聖人の教示に支えられ導かれつつ、社会と人間を仏道に引入し「立正安国」の実現に力を尽すことであろう。

それに付けても、日蓮宗住職教師の取組むべき課題は多く限りない。寺院の護持と発展、檀信徒、末信徒の教化、子弟の教育、信行学の実践、地域への教化、布教資料の作成と活用、社会問題への対応等々、個人的なものから全体的な事がらにいたるまで、宗門の内から外に至るまで、要するに数多くの問題が打開せねばならない課題として山積している。

「下るは登るため、大悪は大善の起る先兆」と、日蓮聖人は説示されている。また、末世法滅の時代にこそ「南無妙法蓮華経の大白法」は流布するとも教えられている。法華経と日蓮聖人の教えを明鏡とする根本的立場から、すべての日蓮宗徒は仏祖の指標に随順し同信・同行・同学への道と連帯して教化実践に励む〈志〉を高めて〈日蓮一門〉を現代に再生させ、法華経と日蓮聖人の信仰教説を今の世に具現してゆく〈志の種まき〉に努力せねばなら

ないだろう。

この〈日蓮一門づくりによる仏の種まき〉運動は、そのまま日蓮聖人報恩の一分となりえるものであろう。これまで積重ねられてきた教化活動ならびに教化研究会議の基本目標は、「仏経と行者と檀那が三事相応して一事を成ぜん」とする〈日蓮一門〉という信仰、教化中心の共同体を築いていく道程にほかならない。

この教化研究会議は、当面する目標として次の三つの柱を掲げてきた。

(1) 10宗務区で教化研究会議を開催し、いっそうの充実を図り教化交流の輪をひろげ教化活動をつみ重ねていこう。

(2) 74管区に教化センターを設置し、地域に適応した教化内容と資料教材を作成活用していこう。

(3) 教化活動に取組む教師中心の伝道宗門づくりをめざし、教師一人ひとりが立上り協力しあっていこう。

これらの当面する目標を達成するためには次の点がまず必要である。第一に教化の担い手である教師による現場の教化体験、事例の交流と問題解決をめざすこと。教化の「研究と実践」を土台にし、その成果を横へひろげ個人的なものを集団的な教化へと推進する教化研究会議の充実と教師の連帯を図ること。第二に、これらの研究実践は、①教学を教化に活かす研究、②布教対象に対応した教化内容と教育についての研究、③現代社会の実状と教化活動の関連についての研究、④社会・宗門・寺院等の場における多様な教化活動の研究、⑤教化活動の協同化、組織化についての教師の役割と実動に関する研究、などの側面から具体化されていくことである。これらの研究内容を継続し具体化することによって実質的な成果を質量共に数多くまとめ上げていくこと。第三に、こうした教化研究の内容は、七百遠忌と遠忌以降の日蓮宗における諸活動の資糧をうみ出し、〈報恩教化と立正安国の実践に取組む教団〉としての日蓮宗の形成と〈日蓮一門〉再生へ連動していかねばならない。中央教化研究会議の強化、地域（宗務区）教化研究会議の充実を基礎に「管区教研」や県単位の教研を開いていくこと、「分野別教化担当」による教師間の地域をこえた横の交流、「教化センター」による教化の組織的な協同活動、などに尽力しながら、同信・同行・同学の教師結集をさらに強め拡大していくこと、などが基本となるであろう。

ところで、第十二回中央教化研究会議は、こうした教化研究の成果と課題に立って開催された。この会議が「七

百遠忌報恩と伝道教団づくりをめざして―報恩の教師結集から同信同行同学の教化実践へ」の統一テーマをかかげて「七百遠忌報恩身延教師結集大会」として開催されたのも、こうした命題を真正面にすえてみんなで語りあい考えあって、教化の研究と実践の方向を打ち出すためであった。第十二回中央教研の総括と内容要旨は、別記のごとくであるが、その意義はおよそ次の点にあったと思われる。

一、七百遠忌報恩と遠忌以降（八〇年代）に対応する教化本位の教団づくりをめざし、「身延教師結集大会」として開催され、教師による教化の研究実践が伝道宗門確立にとって中心的地位を占めねばならないことが明らかにされた。

二、全国各地より三二〇名の教師が結集した。現場の教師に依拠し、その総意を反映結集していくことの重要さと日蓮宗の底力を示し、同時に教師の力をひき出し教師間の連帯を図ることの大切さを明らかにした。

三、素絹五条着用の遠忌法要と廟前の唱題行を修し、教研において初めて本格的に〈儀式と行法〉をとり入れ、〈行学二道と教化〉にとりくむ路線を実行した。

四、教師にたよる教化実践の目標を打出した「身延教研宣言」を採択し、八〇年代に対応する教化方向と七百遠忌にとりくむ当面の方針を提示した。

五、参加者の協力のもとに運営面の分担とその実行がなされ、会場の移動が多かったにもかかわらず比較的円滑に運営された。教務部と現宗研並びに運営委員の協同体制にもとずく運営、資料の事前配布、研修所生の努力、座長から宿泊責任者に至る役配担当者の任務の遂行など、運営面における結集も強められた。

六、十二回教研の成果は、十一回にわたる中央教研、九宗務区の地域教研の積重ねと拡充、第七回教研宣言以来の教化路線、現宗研嘱託会議を中心とした準備などを土台としたものであり、参加者はもとよりこれまで教研会議に支援協力してきた教師一人ひとりの活動と努力を集約したものであった。

七、中央、地域教研の定着と拡大に寄与すると共に、「教化センター」の設置と実動、「分野別担当体制」にもとずく教師間の連携と組織化、教化本位の伝道教団を実現する組織的実動体制、社会実践にとりくむ教化活動など〈行学・教化・社会実践＝立正安国をめざす教化路線〉の具体化を図る目標を提唱し課題として明確化し

た。

この第十二回中央教化研究会議は、七百遠忌と遠忌以降の教化活動に関する基本姿勢と目標を提示したものといえよう。

現代宗教研究所は、これらの内容を報告し、さらに教化研究の成果を紹介することが研究所の任務であるとの立場にもとずき、ここに特集することによって大要を掲載し教化研究活動に取組む参考にしていただきたいと考えている。

〈石川教張〉